島に響く歌

未定の四代目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
島に響く歌

【Ｎコード】
Ｎ６０７４Ｍ

【作者名】
未定の四代目

【あらすじ】
少女は自らの病を知らなかった。
少年はその病を知ってしまった。
二つの視点から描く想い。音楽。
そして・・・
あなたなら友達の病を知ったら何をしますか？

はじまりのはじまり　1

「きみがぁぁぁぁ好きだぁぁぁ」
呼吸ができなくなるくらい叫ぶ。
私の周りの風景は、いつもどおりの教室に戻っていった。
ギターの音が反響して、１０人くらいが存在しているこのちっぽけな檻に音が充満する。
なんて素晴らしいのだろう。
生きているそんな気がしてくる。
ギターを弾いている手は震えていてコードをおさえられなくなっている。
拍手がくる。
１０００人の拍手が私を包み込むんだ。
なぜだろう・・・
遠くから声がするのだ。
「日和（ひより）さん。検診の時間ですよ。」

目を開くと見なれた天井にくっついている蛍光灯が、私に少し遅い朝の挨拶をした。
「日和さん。こんにちは。今日は・・・」
ここ一週間ずっと泊りがけで健康診断をしているのだ。禿げている頭に光があたり眩しすぎて顔が見れない。私はドアのほうに顔をそむけ
「わっかりましたー、一時間後にいつものとこで待ってます。準備しますから・・・いいですか」
そういうと医者は、最近の若者は・・と目で私を責めてきた。作り笑いがひきつっている。馬鹿みたい。医者は、私が溜息をついた瞬間にギラッっと一回私を睨んで病室を出て行った。・・コンコン・・

・ドアをノックする音が響く。「どうぞ」という前にドアは開いて、音楽仲間のヨウがコーラを飲みながらズカズカと入って来る。
「女の子の部屋なんですけど。」
「良いじゃん。別にお前の家じゃないし。」
空になった缶をベッド越しにある小さなゴミ箱に投げながらヨウは続けた。
「個室なんだーー。お前ガンなんだっけ？」
「どこの知識だよ。馬鹿じゃないの・・・」
私はゴミ箱のほうに目をやった。見事に入っている。私は唖然とした顔でヨウを見かえすと、にこっと笑い
「こういうの得意なんだ。もしかしてーーー・・・」
と言いながら私のベッドに座った。
「惚れた？」
「バーカ。ありえない。」
少しの沈黙の後、ヨウは笑った。
「ロビー行こーぜ。のど乾いた。」
私は何も言わずに、つまり了解したという思いをもってドアのほうへ歩いていった。その後ろをヨウがついてくる。
「今日はヨウのおごりってことで！！」
「マジかよ。さっきコーラ買ったから金が。」
ヨウはものすごく残念そうにして次の瞬間には走り出していた。
「歩いてこいよ。先買っとくから。」
ものすごい勢いで廊下を走っていく。やれやれ、子どもは困るなぁ。
私は溜息をつくのだった。

ロビーの椅子に座っていると、２５分くらいしてヨウはやってきた。
「遅かったね。迷った？」
「ナースさんって怖いな。怒られた。」
そう言ってコーラを私に投げた。少しヨウの目は潤んでいた。

「走ったからでしょ？あんたが悪い。」
私はコーラをキャッチし、ヨウを少しいじってみようと思い冷たく言い返した。
「だってさーー。・・・うーーー。」
これ以上は「めんどくさくなる」と思ったので話題を変えることにする。
「ユミちゃん元気？」
ユミとは私の友達でヨウの彼女である。今は夏休みでまったく会っていないが今度遊ぶ約束をしているから友情は壊れない。
「部活だってさ。俺バド部のマネージャーやろうかな。」
私の口は自然と真実を言い始めていた
「絶対むいてない。やめときなよ。絶対に無理だよ。本当に無理だと思う。」
「うーーーー。」
しまった、と思った時には既に遅かった。
「・・・ごめん。言い過ぎた。」
「許す。それより曲かけた？」
立ち直りが早い！！曲がどうした？展開がわけわからん。私は頭は悪くない。
「エロい曲がいいです。」
「えっ・・はっ。バッカじゃないの？」
「てか今日の服なんかスゲーな。手術前みたい。」
「検診だからね。」
私たちは笑いあった。
「その服エロくね？」
「彼女に言うぞ」
「ごめんなさい」
コントをしているようで楽しい。その後も夏について熱い論議をかわしていると、私を呼ぶ放送が流れてきた。約束の時間から２０分も過ぎていたのだ。

「呼ばれたから行くね。」
「おぉ・・・ガンの治療？」
「不謹慎だからやめな。」
僕の言葉に日和は怒るように言い返しながら、それでも笑いながら歩いて行った。僕は大きく手を振ってみた。日和は振り返ることなく上の階に上って行く。
もしさっき一人でジュースを買いに行かなければ・・・そして上の階ではなくロビーの自動販売機でジュースを買っていれば、僕は日和の病気を知ることはなかっただろう。
体中の筋肉が骨になる病気なんて知ることもなかっただろう。今の僕はどうしたらいいかなんてわかんなかった。

はじまりのはじまり　2

「洋太郎君聞いてる？」
由美の声に僕は我に返った。日和の見舞いに行った一週間前から僕は、あの病気について考えていてボーーっとすることが多くなった。
「あぁ、ごめんごめん。都会に行ってみたいんだっけ？」
「うん。私この島から一度も出たことないから・・・」
「じゃぁ二人で抜け出してみる？」
「・・・・・」
由美の頬が赤くなっていく。
「あっ、電話だ。ちょっと待ってて。」
僕は嘘をついた。由美は何故か照れると泣く癖がある。泣かせたと思われたくないし、女の子が泣いてるところを見たらいけない気するから・・・
１０分もすれば泣きやむだろう。その間、僕は大抵この島について考えていた。

僕は今高校二年になる。この島に来たのは小学四年の夏だった。そして最初に出会ったのが由美だった。由美はその時も泣いていた。理由は確か・・・海に麦わら帽子が流されてしまったからだ。夏休みの最中にこっちに来た僕にとっては、本当に初めてであった子だった。その時の僕はなにを思ったか由美に話しかけた。
「どうして泣いてるの。転んじゃったの？」
由美は首を横に振って海の方を指差した。麦わら帽子がきれいな青い海に浮いていた。
「ちょっと待ってて。絶対待っててね。」
僕は自分の家まで走って行った。水着を取りにいったんだ。そのとき交差点からものすごい勢いで自転車をこいで来た奴がいた。それ

が日和だった。見事に僕はひかれて2メートルくらい吹っ飛んだ。
「ごめんなさい。大丈夫ですか？」
日和は泣きそうな声で聞きながら僕に近寄ってきたんだ。

不意に首にものすごく冷たいものがあたった。
「うわっ！！」
「あははっ。ツメタソーー。」
首をおさえながら後ろを向くと日和と由美が立っていた。声の主は日和である。しかしキンキンに冷えた缶ジュースを首にあてたのはどうやら由美の様だ。
「洋太郎君ごめんね。ちょっと驚かせようと思っただけなの。」
「うーーーー。由美。許す。どうせ日和がやれって言ったんだろ。」
ユミがあっさりうなずいた。
「ヨウがいけない。こんなかわいい女の子を一人にしておくから天罰だ。」
私は胸を張って言ってやった。しかしヨウは反省するような動作をしなかった。
「洋太郎君なに考えてたの？」
ユミがヨウに缶ジュースを渡しながら尋ねた。おいおい、私の入りにくい空間を創らないでくれ。明らかに私は邪魔者じゃないか。
「ん・・・初めて由美に会った日のことを思い出してた。」
「あっ・・・」
ユミの顔が赤くなっていく。私がヨウに会ったのはブレーキが壊れたあの坂である。

思いっ切りハンドルを握っているのにブレーキはかからなかった。このまま交差点に入って車にひかれると思った。そんな私の前に現れたのがヨウだった。その時私は視界のなかのものすべてがスロー

に見えていたんだ。ヨウの走る顔も繊細におぼえている。汗だくになって走っていた。私がヨウにぶつかると、全く止まらなかった自転車は止まったんだ。奇跡が起きたと思った。
「イテテ・・・大丈夫だよ。君も大丈夫？」
頭から血を出しながらヨウは私の自転車のかごにたくさん入っていた花を見て
「それちょうだい。」
って私にほほ笑んだね。
僕は日和を後ろに乗せて走った。日和が腰をつかんだのがくすぐったくて何度も転びそうになったんだ。由美がいる浜辺に着くと
「ユミちゃーーん。どうしたのーーー。」
って叫ぶんだ。びっくりしたよ。後耳も痛かった。僕は自転車から降りたらすぐに由美の方に花を持って走った。

「まさかあそこから花の王冠を作るなんて思わなかったーー。私もほしーーって思ったなーー。」
「洋太郎君・・・ありがとうね。」
「まぁ。結局由美は俺見て泣いたけどな。」
「・・・ごめんなさい。」
「うっ・・・いいよ。由美のせいじゃないし。」
僕は顔をあわせられなかった。今思うと・・・ものすごく恥ずかしい。ここから逃げ出したい。
「あれぇ。ようたろうくーーん。恥ずかしいの？」
「うっ・・・・・ウルセーー。だいたいな、お前が」
「なによ？えっ？言ってごらんよ。」
「なんでもないです。」
僕は口ゲンカは弱い。平和サイコーー！！
「ならいい。じゃぁ私は家帰んないと。」
「つーかなんでここにいたの？」

「診断の結果もらいに行ってた。健康健康」
僕は思った。日和は自分の病気を知っているのか？バタッ・・・日和が何もないところで転んだ。
「！！日和ちゃん」
私は自分の足に違和感を感じながら立ちあがった。そして二人に健康診断の結果を見せて言った。
「立ちくらみには気をつけなよ。バスで帰ろう。まだやってるかなー。」
私は二人に手を振り溜息をついた。健康なんでしょ？ちゃんとしてよ。そのまま私は歩いていく。足首が全く回らなくなっていた。捻挫？折れた？とにかく私は歩いた。

もうすぐ夏が終わる。日和の病気は本物だ。歩き方が変だ。僕は得体のしれない恐怖に怯えた。
まだ始まったばっかなんだろうけど・・・
僕はどうすればいい？日和にとって最善ってなんだ？
僕にはまだわからないことばかりだったんだ。

はじまりのはじまり　2（後書き）

はじまりのはじまり終了。
がんばる

8月31日　洋太郎と島

暑い！！昼間の部屋はサウナより暑い。
「洋太郎君は今日のお祭りには行くの？」
電話越しに由美の声がノイズと一緒に聞こえる。電波がそんなによくないのだろう。さすがは島だ。携帯電話はあるけど電波は悪い。
「あー・・・悪い今日路上ライブ見に行くんだ。」
「そっか。私も今日は予定入ってたから、日和ちゃんの家に宿題取りに行くの。」
「同じ学校なんだから明日もって来てもらえばよくね？」
僕は単なる疑問を投げ掛けた。答えに興味はあまりなかったけれど。
「なんかね宿題見せて欲しいんだって。生物１の植物の観察日記。」
「それじゃ日記じゃない。」
僕は突っ込みながら笑った。由美も、そうだねと後につづいて笑ってくれた。ブツッ・・・電話は一方的に切られ後に残ったのはセミの鳴き声だけだった。僕は時計の針を見て静止した。針が動かない。僕は今タイムスリップしているのか？だがしかしセミは元気に鳴いているし、引き出しの中を見ても押し入れを見てもタヌキみたいな猫型の青いロボットはどこにもいない。もし時代を無視してどこにでも行けるのなら僕はどこに行くのだろう。僕は両親に捨てられた。

いつもどおり家に帰ると一枚の紙が机においてあった。そこには電話番号と島に住んでいるおじさんの名前が書いてあった。十歳になる自分でもわかった。父さんと義理の母は帰ってこない。これから会うこともない。
母さんなんで死んだんですか？
僕はどうすればいいですか？

「洋太郎！！お前今日コンサートじゃないのか？」
おじさんの声が脳にキーンとこだまして消えていった。僕は知らないうちに眠っていたらしい。父さんがいなくなったおかげで僕はここにいる。中学二年の頃に一度島を出て父さんを捜しに行ったことがある。結局みつけることはできなかったけど。
おじさんは僕を自分の子供のように可愛がってくれる。母さんの兄貴なだけある。それとも漁師のもつ人情ってやつか？どっちでもいい。
この島に来て驚いたことは駅が三つしかないこと。電車は一台しかなく毎日十本しか出ないこと。中心部の駅の周りにしかお店がほとんどないこと。そして小学校は二つ中学、高校は一つしかないこと。
僕のいた小学校は六人しか先生がいなかった。
田舎なんだ。少年の僕にとって神秘的な世界がこの島だった。
「洋太郎！！なにボーっとしてんだ！！コンサート遅れるぞ！！」
「おじさん大丈夫だよ。時間決まってないし。」
「今7時だからな！！今日ワシはゲンさんと飲み行くから飯は「シゲねぇ」の店で食べてこい！！」
はっきりとしたおじさんの声がセミの声をかき消した。そして僕を現実に戻した。ライブは7時半からだ。自転車で中心部までには一時間以上はかかる。そして電車はあと五分で出てしまう。まずい！！寝すぎた。僕は焦りながら自転車にまたがった。
僕の家は東の港にあって魚臭い。
由美の家は西の浜辺の近くの旅館。
日和の家は中心部より西側にある地獄坂のてっぺんにある花屋。
そして病院と学校は西駅、東駅、中央駅の三つで最もデカい駅・・・つまり中央駅の近くにある。路上ライブは基本中央駅でしているみたいでよく行く。
東駅に着くと駅長のゲンさんが僕に声をかけてくれた。
「間に合ったねぇ。乗るかい？」

「はいっ！！遅くなりました。」
すでに時間は7時２０分になろうとしていた。ゲンさんは僕のためによく電車点検を長くしてくださる。すごく嬉しい。電車の中に人はいなかった。
「今日夏祭だかんねー。北にある神社わかんだろ？あそこにみんな行ってんから今日は暇じゃのー。」
「おじさんが飲みに行こうって言ってましたよ。」
「ほんじゃ「ヨッちゃん」と祭嵐隊でも組もうかね」
祭嵐隊とは射的、金魚すくい等々たくさんのゲームを一回で全てクリアする集団のことで、この島の子供達の中では伝説として崇められている。
ヨッちゃん、ゲンさん、シゲねぇ、あけみ、の４人組で島の屋台からは恐れられている。ヨッちゃんとはおじさんのことである。おじさん達スゲー。

僕は自転車と一緒に電車に乗りこんだ。１０分もあれば中央駅に着くだろう。僕ははるか遠くに見える暗い海に目をやった。日和。お前はまたちゃんと僕の前に現れてくれるのか？こんなに町は・・・島は穏やかなのに本当は病気なんてお前の冗談じゃないのか？そうであってほしい。僕は海に映る星達にがらじゃないが祈った。

8月31日　日和と勘違い

私はユミに電話した。正確にいうと今日十回目になる電話をしている。お昼のご飯がソーメンだったらきっとユミのノートに醤油をかけていただろう。ソーメンは醤油で食べるものだと思う。私は味オンチではない。

「はい・・・もしもし。」

「ユミ!!なんで電話にでないの!!」

「電池切れちゃって」

私はユミの話を聞くことなく要件を伝えた。

『歩けないから迎えに行けない。』

それだけ言うとユミは少し考えて小さくわかったと言った。ケータイの時間は1時23分。ユミは2時に来る。私はユミが来るまで暇をつぶさなければならない。私は作詞をするために車椅子を動かして机と向き合った。ギターを手に取る。足が使えないと移動はこんなにも大変なのかと、実感した。

母が言うに両足首が折れているらしい。原因はわからない。ただ痛みはまったくないからよかった。しかし昔から注射と薬が苦手だった私にとって痛み止め薬を飲むことは、苦痛以外のなにものでもなかった。母に痛くないからと訴えたが医者が、あのハゲが言っていたからと、私の意見は無効審査となった。

大人は嫌いだ!!ギターを弾きながら想いを叫んでいるとピックにヒビが入った。車椅子の手を乗せるところが邪魔で上手く弾けない。イヤになる。しょうがないからまた机と向き合う。詩は魂から書くといいってストリートミュージシャンの人に教えてもらった。

どんなに逃げても今は終わる

明日になってしまったらおしまい
セミは一瞬の一生を歌って終わるのに
僕は長い今日にうんざりして終わる
だるいからもう寝たいんだ
たとえナニを失ったとしても
どうせ明日はくるんだ

「ごめんくださーい。」
優しいゆっくりとした声がした。顔を見なくても誰だかがわかる。きっと母が私の部屋まで彼女をつれて来るだろう。ユミのお土産はいつもおいしいチョコレートケーキである。ユミが家に来ることは、私にとってはおいしいケーキがくることと同じなのかもしれない。いや同じだ。ユミには絶対に教えられない秘密である。
「日和ちゃんこんにちは。」
そういって笑顔でユミは私の部屋に入ってきた。
「やぁチョコレートケーキ君。」
ふざけて言った言葉にユミは首をかしげた。ちょっとちょっと・・・可愛いじゃん!!もし私が男なら絶対にユミに惚れていたと思う。しかしユミにはヨウという冴えない彼氏がいるのだ。
二人が付き合い始めて何年が過ぎただろう？わからない。私達三人はいつも一緒だったから、とくに何かきっかけがあったわけではなく気が付いたら二人は他人から付き合っていると思われるようになっていた。
ちなみに私はヨウの男友達、ユミのお兄さんという勝手なイメージ

がついていた。私は女の子だ。だから私達は何か特別な記念日なんてものはあまりもっていなかった。楽しいからいいんだけど。
「ユミは初めヨウのことどう思った？」
「・・・頭から血を出しながらお花の冠を作る人。」
まんまじゃないか。そうじゃなくてもっと性格的な方と付け加えると今度は
「赤！！」
と、天然をおおいに見せてくれた。ユミ的にはオーラを言いたかったらしい。ユミ・・・そのオーラの色も血の色だぞ。心の言葉は相手に聞こえないからいいと思う。
もし聞こえるようなら発狂していたことにちがいない。いろいろと考えることを我慢しなきゃいけなさそうだし。私は陰口とかそういう、たぐいのものは嫌いだ。グダグダと話をしていると5時になっていた。
「はっ！！日記！！」
ユミと顔をあわせる。ユミもあわてて猫が表紙の日記帳をだした。突っ込まないぞ。私は誓った。しかしその誓いは崩れることになる。しばらく日記を必死に写しているとノートの上に落書きがあった。もの凄く綺麗なお姫様が眼を瞑っている。次のページには反対方向を向いたヨウがかかれていた。何がしたいのかが私には理解できた。私はこの二ページだけをもって電球のほうに掲げた。二つの絵は透けてその唇を重ねていた。
「ぷっ！！ふふ、あはははは。ロマンチストか！！」
私の大爆笑と、ビリッという音と同時にユミは立ち上がり私の手からノートを奪いとった。その顔はさくらんぼみたいに赤く染まっていた。私は追い討ちをかける。
「この男の子はヨウだよね？このお姫様は誰？ユミ？」
ユミは下を向きながら首を横にふって言った。追い討ちは見事に失敗した。このお姫様はユミ自身だと確信していたからちょっと残念だった。

「日和ちゃん。」
私はその答えに目が点になった。なんで私？私こんなに可愛くないよ。お姫様みたいに綺麗じゃないよ。
「私？ヨウと私がモデル？」
ユミは顔を縦にふった。冗談きつい。
「だって洋太郎君、なんか私に隠し事してるんだもん。多分日和ちゃんのことだと思う。」
ユミのカンはよく当たる。しかし何をヨウは隠しているだろうか。私には見当もつかなかった。ユミは勘違いをしている。ユミの出した答えは間違っている。
私とヨウは付き合ってなんかいない。
「今電話してあげる。」
私は真実を求めるためにヨウに電話してみた。
「私とヨウは付き合ってないからね。ユミは安心しなさい。」
ユミは静かにうなずいた。ユミは頭のいい子だから私が何をしようとしているのかを言わずとも理解した。ヨウは電話にでない。あの馬鹿は何をしているんだ？２０分の呼び出しにヨウがでることはなかった。
「日和ちゃんもういいよ。日和ちゃんの行動には誠意を感じたから日和ちゃんの言葉を信じる。私もごめんね。」
ユミが謝る必要はない。そう思ったが言葉にならなかった。私は諦めてケータイを机においた。
「今日路上ライブあるって言ってたからそっちに行ってるのかも。」
ユミは路上ライブについてはあまり詳しくはない。今はまだ６時半過ぎだからライブは始まっていないだろう。しかし私の脳裏にはアイデアが浮かんだ。
「ユミ！！一緒に路上ライブを見に行こう。」
私はユミに笑いかけた。ユミの意見については全面的に無視の方向で。つまり私の意見は決定される運命なのである。適当にカッコイイことを並べるとユミはしぶしぶ了解した。私達は外に出た。ユミ

に車椅子をおしてもらいながら私達は中央駅へ向う。ケータイは7時前を示している。30分後には駅に確実についている。そこでヨウに誤解を直接断ち切ってもらえばいい。
道は誰もいなくて凄く雰囲気が違っていた。月の光は私達を包むように見守っている。街灯が足元を照らしてくれる。ギブスに包まれた足首に感じていた違和感はスネのところに移動していた。別になんともない。
ただむずむずとした違和感は私の作曲活動を邪魔してくるのであった。

8月31日　路上ライブとそれぞれの・・・　1

中央駅に電車が近づくにつれ、ギターなどの楽器の音が聞こえてきた。いつもならまったく聞こえてこないのに・・・
駅に着くといつものにぎやかな街はなかった。誰もいない。お祭りの影響力はこんなにすごいのか！！
「洋太郎ー。次の曲いくよー。・・・みんな人きたから音しぼって。」
ベースボーカルの「ちあきさん」は僕を見つけると大きく手をふった。
ちあきさんとは仲が良くていつも日和と一緒に、高校の近くのちあきさんの家までギターを教えてもらいに行くのが日課になっていた。
僕はギターの人達に教えてもらいたいのだが、ちあきさん以外は南部に住んでいるらしくとても自転車では行けないから断念した。ちあきさん達のバンドは三人組でベースが一人ギターが二人いる。・・・ドラムがいないのは最初は気になったがそれほど曲に不具合はなく、むしろ良い個性だと思うようになっていった。
「洋太郎は何聞きたい？」
「ライオンの泣いた夜がいいです。」
この曲は僕に余裕を与えてくれる。
この曲を聞くとなぜか考えがまとまるんだ。
歌の内容は、弱いライオンが友達のシカを守るためにトラと戦い、そのなかでシカはライオンにとどめをさそうとするトラの牙に息絶える。
ライオンは自分の弱さを恨みながらも二度と涙を流さないために月を見て吠える。
友情の歌だと、ちあきさんは言っていたけれどそんな歌には思えない。
「キミは僕に何を残したの。僕にはーーわからないよーー」

ライオンの泣いた夜が町中に響いている。
私はユミと顔を合わせ、声の方へと急ぐようにアイコンタクトした。
ユミの足取りは少しだけ速くなったように思えた。少しずつ駅に近づいていく。
いつもより音がデカイ。その分私は興奮した。こんなに大音量で音楽を聞いたことがなかった。先客がいる。体育座りでじっと耳を傾けていた。
「洋太郎君！！」
ユミは私をおいてヨウの方へ走って行ってしまった。やれやれさっきまで心配ばかりしていたユミはどこにいったのやら。
由美が走ってくる。抱きつきは・・・しないか。由美は僕の横に座った。なんで由美がいるんだ？僕は理由を聞く前に遠くに座っている日和を見つけて一緒に来たことを察した。
まてよ・・・日和の座っているところに椅子なんてあったか？絶対にない。道のど真ん中に椅子があるなんて聞いたこともない。ならばあれは、なんなんだ？
「友達かい？可愛い女の子だね。」
演奏をやめてちあきさんが尋ねてきた。いやらしい笑みを浮かべながら・・・僕はなんて答えるか迷った。
「彼女ですよ。ちあきさん。」
私はチアキの質問にヨウの代わりに答えてあげた。
「やっぱそうか！！日和には、か・・・れ・・・」
私を見たチアキの顔がくもる。
「足どうした。両足ともか？」
「はいっ。骨折しました。」
私は正直に答えた。

違う。

僕は危うく言葉を発するところだった。どうやら日和は本当のこと

を聞かされていないようだった。僕は日和を見つめた。日和はちあきさんとの会話に夢中だった。
「洋太郎君また悲しい目してる。何かあるなら私にも話してよ。」
由美が耳元で呟く。日和の親は日和に病気のことを言ってはいない。だから僕も由美や日和に本当のことを言わないことが、まったく病気のことを知らないようなふりをするのが最善なんだ。そう思った。そうか。
「大丈夫。俺は大丈夫だよ。」
そういって今にも泣きそうな由美の頭を撫でた。由美は僕を心配してくれたんだろう。由美。心配かけたね。でも僕はもう大丈夫だよ。
「ちあきさん、これでもかってくらいのラブソングお願い！！」
私は場の空気を読んで小さな声で伝えた。
私ってできる女だよね？
チアキはＭＯＮＧＯＬ８００の小さな恋の歌を歌いだした。お前の決め手のラブソングはズレている！！私は突っ込みを入れながら二人の後ろに移動した。
私もライブがしたい。
学校で、路上で、最後はコンサートホールでしてみたい。神様、有名になりたいとはいいません。ただ細やかなこの願いを叶えて下さい。あとでチアキとヨウに相談してみよう。多分２つは、ちかいうちに叶えられるだろう。だって行動すればいいだけじゃん。ヨウとユミは私の企みも知らないでいいムードで聞き惚れている。ユミの心配は本当にどこにいったのか、私は不思議でならなかった。
女わからん。女の私がわからないんだから、科学でも証明は難しいだろう。私は１人、笑いをこらえた。

8月31日　路上ライブとそれぞれの・・・　2

「腹へったな、洋太郎なんか買ってきて。金渡すからさ。」
ちあきさんはお腹をおさえながら僕に言った。自分でいってください。そう言う前に日和が言った。
「おごってくれるんですか？ありがとうございますー。」
日和。ナイス！！バンドの人達の協力もあり見事におごってもらえることになった。
「じゃあヨウ買い出しよろしくー」
「はっ！？俺が行くのかよ！？」
「あたりまえでしょー働かざるもの食うべからず！！」
「うーーーー。」
嫌な顔をしたが実際は僕が買いに行く以外に食べ物を調達する方法はなかった。ちあきさんは演奏。日和は歩けない。由美を一人で夜の誰もいない街を歩かせたくない。結果僕が行くことは確定しているのだ。
「はいはい。わかりましたよ。シゲねぇの店でいいですか？」
「おー頼むわー。」
シゲねぇとはおじさんの友達で居酒屋みたいな何でも屋を経営している。基本的には島民の溜り場となっているらしい。駅から自転車で二分くらいのところに店があるから今日みたいなときは楽でいい。島にコンビニはない。シゲねぇとコンビニといえば・・・

シゲねぇと初めて会ったのは小四の秋である。
「洋太郎！！コンビニで酒買ってきてくれ！！シゲねぇを捜せば見つかるから！！日本酒三本とビール二ダース。」
あの日はおじさんの家で飲み会があり、家の高いお酒の他に安い酒が必要になったらしくパシリを頼まれた。自転車で一時間強こいで

中央駅に着き、辺りを見ると見なれたコンビニの看板たち「7」や「歩くK」「牛乳ビン？」はどこにもなく泣きべそをかいた。
そういえばあの時が初めてちあきさんに会った日でもあったんだ。ギターのきらびやかな音と一緒に少し音程やリズムが変な「翼をください」が聞こえた。歌が聞こえるほうを見ると中学生か高校生か、わからないがとにかく凄く楽しそうに一人で弾き語りをしているちあきさんがいた。ただひたすらにカッコよかった。なんというかカッコいい。ちあきさんは僕と目があうとほほ笑んだ。キラキラしていて男の子でも天使はいるんだなーって実感した。
「あのー・・・シゲねぇのコンビニって知ってますか？」
「シゲねぇ？知ってるよ。あそこの教会みたいな建物あるだろ？今日は三階にいるから。」
指さす方を見ると、確かに他の建物とは明らかに違うまさしく教会が近くに建っていた。
貴方はそこからきたんですよね？と聞くと笑いながらまたギターをちあきさんは弾きだした。僕も急いでいたからすぐに自転車にまたがり教会を目指した。
教会の下から建物全体を見上げると
「でっけー。」
思わず第一印象を口にしてしまった。中に入る。案内が壁にはってあった。内容はそれぞれに服、家庭用品などと売ってる物の種類が書いてあり、さらにその横に曜日が書いてあった。あと七階建て。日によって開いている店が違うらしい。デパートに限りない近いけれど違う。何でも屋なのだ。
ちあきさんに言われた三階には「食料品とか、あと酒。月曜以外開いてる。」と書いてあった。内容が雑だ！！そんなとこを思いながら階段をの登っていくと「コンビニ！！」と、でかでかと書かれた看板を見つけた。
のちに聞いた話だがこの看板はおじさんが書いたらしい。だからコンビニって僕に言ったのか。コンビニの中？・・・コンビニの中は

とても綺麗でモダンだった。
教会の中は教会じゃない。大量のお酒をレジに持って行くと・・・
ハイテクな機械は一切ないが・・・とにかく持って行くとサングラスをかけた可憐なおばさまが座っていた。
「坊や若いのに飲んべえなんだねぇ。今度居酒屋においでね。ヨッちゃんと一緒に。」
といいながら投げキッスをされた。僕のことを知っているのか。この時は冗談だと思っていたお酒の誘いだが中二のときおじさんと居酒屋に行ったらビールを飲まされた。
その時の記憶は定かではない。

「シゲねぇ!!こんばんはー。」
居酒屋に着くとシゲねぇはカウンターで一人カクテルを飲んでいた。
凄く絵になっている。
お酒を飲まされる前に注文しないといけないと昔のトラウマから脳が自然と僕に命令した。雑談もなくパーティーセットAとBをたのみ玄関に近い椅子に座って待っていると、シゲねぇは料理を作りながら僕に話しかけてきた。
「今日は坊主たちうるさいねぇ。」
「はいっ誰もいないからちょっと調子にのってみました。」
そうかいそうかいとシゲねぇはうなずいた。
店内に焼きそばの美味しそうな香りがただよう。
「洋太郎。車椅子の子がいたけれど・・・」
「日和です。両足折ったみたいですよ。」
シゲねぇが全部言う前に答えた。
シゲねぇは聞こえないくらいの溜息をついた。
そして静かに語り口調で僕に話しだした。

8月31日　路上ライブとそれぞれの・・・　3

「洋太郎君遅いね。」
ユミは不安そうな顔をしながら下を向いた。ヨウが買い出しに行って30分以上経っている。確かに遅い。
「シゲねぇに電話してみようか？」
チアキはそんなユミに声をかけた。誰一人と賛成していないのに電話をし始めていた。こういうときのチアキは、手がはやい。チアキはケータイを持ってない手で頭をかき回しながら夜空を見上げた。・・・かっこいい。もし同い年だったら多分好きになっていた。
私に好きな人はいない。昔はいた。
「洋太郎ー。」
チアキが誰もいない道の方を見て手をふっている。ユミもそっちの方を見て同じように手をふった。私には何も見えない。ぼやけているんだ。みんな立っているから私よりも遠くが見えるのか？いやそんなとこはない。物理的にあり得ない。・・・多分。
「・・・より・・日和！！」
「あっ！！えっ！？きゃっ！！」
日和はちあきさんを思いっきり殴りとばした。鈍い音がする。絶対痛い。真っ赤になった頬をおさえながら焼きそばを持っているユミのところ近寄り
「痛イデス。焼キソバウマイデス。」
と独特ななまりの入った日本語を発した。いや英国人の日本語と言った方が正しいかも知れない。日和はちあきさんに謝りながら目をこすった。横にいた由美も時間を確認して少し眠そうに
「もう時間も遅いし帰ろう？」
と提案してまた時間を見た。高校生ならまだ活動時間である。しかし由美の睡魔は9時を越えると異常と言ってもいいくらい大きな睡眠衝動を体に与えるらしい。日和もまたそうだ。島民のほとんどが

そうなんだと思う。
「んじゃ、お開きにすっか。」
チアキはそういうと、ほっといていたバンドメンバーと楽器を片付けはじめた。
「洋太郎女の子二人で夜の道は危ないから連れて帰れよ。」
チアキは手を休めることなく言った。ヨウは何も言わずに自転車を引きずりながらゆっくりと歩き始めた。しばらく歩いているとヨウはチアキのいる所を見ながら会釈した。チアキがそれに気付くことはないのに。
誰もいない道を三人で何もしゃべらないで歩いている。気まずい。沈黙を破るようにユミは車椅子を押しながら言った。
「洋太郎君と日和ちゃんは音楽発表しないの？」
ヨウは何も言わずただ遠くを見つめていた。私も胸のところで言葉がつっかえていて何も言えなかった。９月の半ばに文化祭がある。文化祭は各クラスと部活の出し物で計１６。それと地域の方々の有志がいくつかあり、意外にもかなり充実したデキになる。だから部活に入っていない私達だとおそらく舞台では演奏できないだろう。
「ユミには悪いけど・・・」
「でよう。」
私の言葉をさえぎるようにヨウは言った。
「たぶんだけど、ちあきさん達も有志で参加するだろうから時間を少しわけてもらおう。」
いつものヨウではない気がした。自信に溢れていて不可能だとは思っていないようだ。そして何よりその発想はさえていた。やればできる子。ユミは満面の笑みを浮かべた。くそぅ。かわいいなー。ちょうどその時。満天の星空に大きな花火があがった。音と共に一つ一つの火の塊は消えていき、はかなさに胸が押しつぶされそうだ。こうやって三人で花火を見る事がまたできるのだろうか。考えれば考えるほど寂しいな。二人が気づかないように私は目にたまった液体を手で拭った。

花火の音が消えた。そして空に花火が打ち上げられることもなくなった。虚しさが突き刺さる。
ライブをしたとしても日和がいなくなってしまったら残るものはなんなのだろう？だけど僕はライブをしなければならない気がした。理由なんてないし、どうでもいい。
「あんたはただ、つっ立ったままでいいのかい？」
シゲねぇが言っていた言葉が脳内を駆け巡る。
確かにシゲねぇの言葉と由美の言葉は僕を動かした。

「あんたはただ、つっ立ったままでいいのかい？」
「えっ・・・」
シゲねぇは、日和の病について知っているのだろうか。それとも気まぐれに近い何かなのか？僕には知るよしもない。
「昔ねぇ、悩んでいる人がいたんだよ。あたしはその人の性格を知っていたから何もしないで、ただ見守っていたんだよ。」
だんだんと声が震えていっている。顔は合わせなかったから泣いているのかはわからなかった。
その人はどうなったのだろう。
「今日は祭なんだっけねぇ。」
シゲねぇは話題を変えた。なにを考えているのかまったくわからない。四人で遊んだこと。高校、恋愛、大人になってから、等々。
大人になってからの話は四人の思い出のようなものはなかった。あけみさんについて全くシゲねぇは話さなかった。僕はこの島に来て一度もあけみさんに会ったことがない。たぶん離島したのだと思う。こんなにもいい島から出ていくなんて・・・相当なことがあったんだろうな。
僕がこの島に来たみたいに。
シゲねぇの話はやたらと長かった。しかし覚えているのは最初の言葉だけだ。
店を出ると遠くから太鼓の音が聞こえてはきえていった。

僕を包みこんでいたもやもやとしたソースの匂いと感情は、音と風に打ち消されるように少しずつなくなっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6074m/

島に響く歌

2010年10月8日12時54分発行